

空中都市・マチュピチュ

現在ユネスコに登録されている世界遺産は911箇所ある。その中で観光客に最も人気の高いのが、ペルーの山中にあるこの空中都市・マチュピチュである。標高2,280mの頂にある。日本で言えば、北海道・大雪山旭岳ほどの高さである。

世界遺産に登録される前の1983年5月、アマゾンからの帰りに仲間と別れ、ひとりペルーを訪れた。リオ・デ・ジャネイロからペルー・リマ空港に到着したのが真夜中で、翌早朝のクスコ行フライトに備えて空港ロビーで仮眠したことが懐かしい。

クスコから現在運行の豪華観光列車とは天と地の、旧型木造列車でウルバンバ川に沿って到着した終点アグリス・カリエンテスからバスに乗り換え、九十九折りの未舗装道路を20分ほど登った。バスを降り暫く歩いて辿りついた頂の眼前に、階段状の遺跡が圧倒的な迫力をもってぬっと現れた。よくもこんな不便な処に人の住める集落を築いたものだと驚きもし感慨にも耽り、往時の人々の叡智と実行力に舌を巻いたものである。

しかし、残された遺跡を見て、つい古代ピラミッドやコロッセオと同じ時代の建造物のような時代感覚に陥りがちだが、マチュピチュは16世紀にインカ民族が築いたもので、取り立てて古いものではない。すでにわが国では信長・秀吉の天下統一が成り、寝殿造りや神社・社寺建築を経て城郭建築の時代に入っていた。今日の感覚から言えば、秩父山中に城郭を築いたようなものだろう。

まもなくしてマチュピチュは侵略したスペイン人によって滅ぼされてしまったが、伝統文化の形と息吹が滅びることはなかった。著名な文化遺産として今では世界中から多くの観光客が訪れ、偉大なインカ帝国時代の名残とインカ民族祖先の息吹に触れている。

帰り道に下るバスの先回りをしながらどこまでも付いてきては九十九折りの角地で、ワイワイ物売りをする逞しい子どもたちの明るい笑顔がやけに印象に残っている。